

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第130集

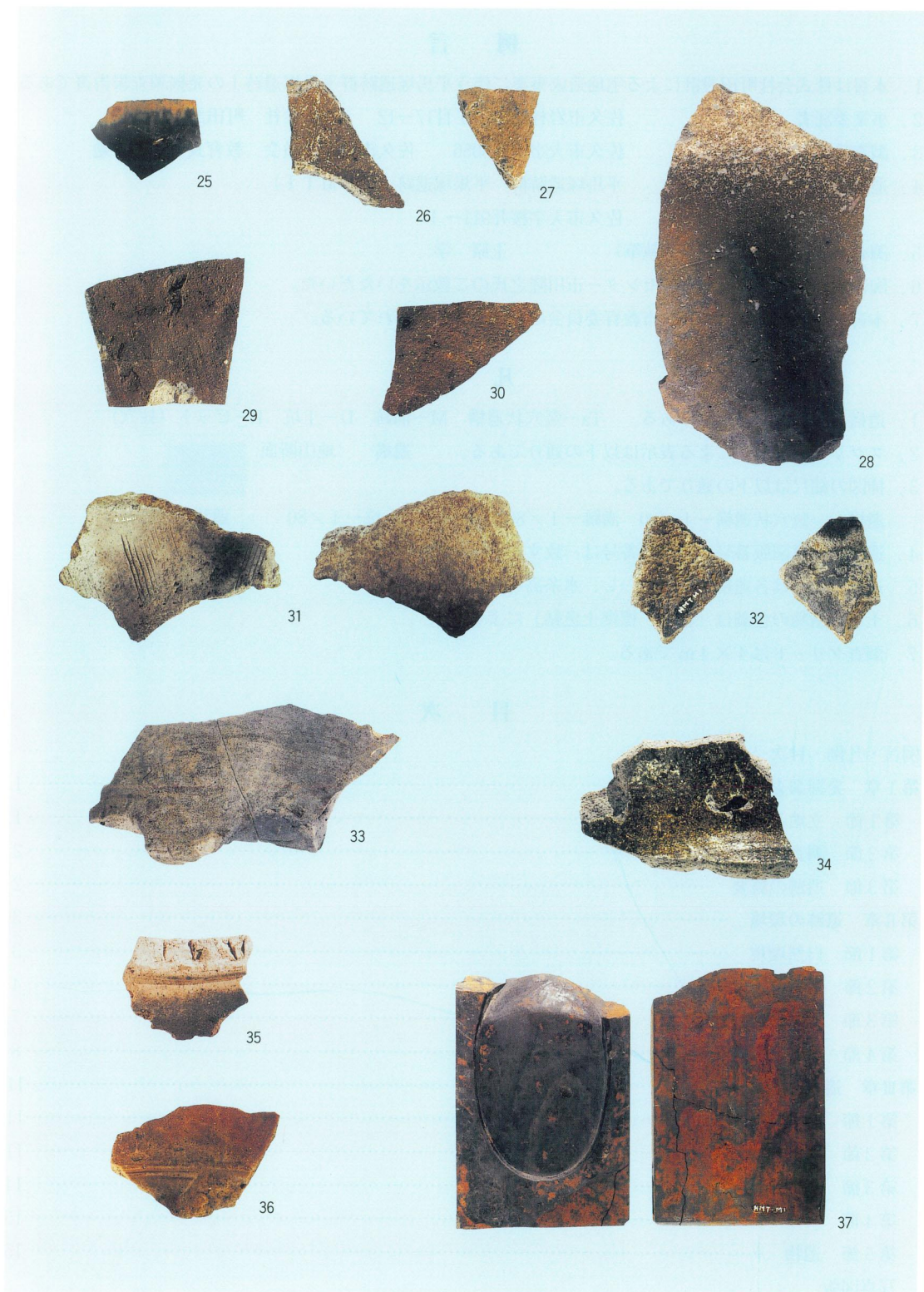
平馬塚遺跡群

平^{へい}馬^ま塚^{づか}遺跡 I

長野県佐久市大字桜井平馬塚遺跡群平馬塚遺跡発掘調査報告書

2005. 2

株式会社 町田設計
佐久市教育委員会

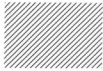


平馬塚遺跡Ⅰ 出土遺物

例 言

1. 本書は株式会社町田設計による宅地造成事業に伴う平馬塚遺跡群平馬塚遺跡Ⅰの発掘調査報告書である。
2. 事業委託者 佐久市岩村田北一丁目17-12 株式会社 町田設計
3. 調査受託者 佐久市大字中込3056 佐久市教育委員会 教育長 高柳 勉
4. 遺跡名及び発掘調査所在地 平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡Ⅰ (HMTⅠ)
佐久市大字桜井911-1
5. 調査担当者 (現場・編集・執筆) 上原 学
6. 陶器類は長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏のご教示をいただいた。
7. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略称は次の通りである。 Ta- 竪穴状遺構 M- 溝跡 D- 土坑 P- ピット (柱穴)
2. スクリーントーンによる表示は以下の通りである。 遺構 地山断面 
3. 挿図の縮尺は以下の通りである。
遺構 竪穴状遺構- 1/80 溝跡- 1/80、1/160 土坑- 1/80 遺物 1/4
4. 遺物の写真図版番号と実測図番号は一致する。
5. 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水系高を標高とした。
6. 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。
7. 調査グリッドは4×4mである。

目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 立地と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 遺跡の概要	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 周辺遺跡	4
第3節 桜井地区の歴史	7
第4節 基本層序	8
第Ⅲ章 遺構と遺物	11
第1節 竪穴状遺構	11
第2節 土坑	11
第3節 溝跡	14
第4節 ピット	15
第5節 遺物	15
写真図版	

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 立地と経過

平馬塚遺跡群は、千曲川と片貝川に挟まれた自然堤防上の桜井地積にあり、集落の周辺は現在も広く水田として利用されている。標高は660m内外を測る。遺跡群付近の調査は昭和52年に上桜井北遺跡の調査が行われ古墳時代から平安時代の住居址17軒、土坑状の特殊遺構などが調査されている他、西側の石堂遺跡では竪穴状遺構が発見され、陶磁器・土鍋など15c代の遺物が出土している。また遺跡群内には平馬塚古墳が認められる他、北側一帯に中世の遺跡と考えられる泉屋敷跡と称する伝承地が存在している。

今回、平馬塚遺跡群内において、町田設計による宅地造成事業が行われることとなり、遺構の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果、遺構（溝・土坑・ピット）、遺物（土師器・陶器等）が認められたことから、開発主体者と協議を行い、開発地域のうち進入道路部分の発掘調査を佐久市教育委員会が主体となり実施した。



第 1 図 平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡 I 位置図 (1 : 100,000)

第2節 調査体制

教 育 長 高柳 勉
教 育 次 長 赤羽根寿文
文 化 財 課 長 小林 正衛
文 化 財 係 長 高村 博文
文 化 財 係 林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田卓也、富沢 一明、
上原 学、赤羽根太郎、出澤 力

調 査 担 当 者 上原 学
調 査 員 江原 富子、碓氷 知子、柏木 義雄、中嶋フクジ、比田井久美子、
武者 幸彦、渡邊久美子、渡辺 長子

第3節 遺跡の概要

遺 跡 名 平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡Ⅰ (HMTⅠ)
所 在 地 佐久市大字桜井911-1
調 査 期 間 平成16年10月4日～平成16年10月19日 (現場)
平成16年10月21日～平成17年2月26日 (整理)
調 査 面 積 330㎡
調 査 遺 構 竪穴状遺構-3棟
溝跡-2条
土坑-37基
ピット-多数
出 土 遺 物 縄文土器
土師器 (坏・甕・高坏) 古墳～平安
須恵器 (甕) 古墳～平安
陶器 (古瀬戸14c末・天目茶碗、常滑13c以降・甕)
須恵質土器 (在地すり鉢14c、火鉢14c、風炉釜14～15c)
土師質土器 (風炉釜)
硯

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

佐久地域は、周辺を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には現在も活発な活動を続ける雄大な浅間山が聳え、南には蓼科山が存在する。東には浅間山と蓼科山をつなぐように北関東山地の北端がのび、群馬県との県境をなし、西は御牧原・八重原といった台地が広がり、蓼科山の裾野と接している。

佐久市における水系の代表は千曲川であり、源は南の川上谷に発し、南佐久から北流しながら沢筋からの支流を集めつつ水量を増し佐久平に入る。その後野沢付付近まで北流し、そこから流れを北西に変え、立科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の麓に源を発す湯川、関東山地からの支流である田子川、志賀川等を集める滑津川といった河川と合流し、上田、長野方面に北流する。

このように佐久地域は周囲を山地に囲まれ、水にも恵まれた一つの盆地であり、佐久平と呼ばれている。この盆地は地質学的に大きく二分され、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して注ぐ東西線を境として、河川の北側段丘上は680m、南側は660mを測り、20m内外の比高差の断崖を認めることができる。北部地域は、北に聳える浅間山（黒班山・前掛山・中央釜山からなる成層火山）の山麓末端部の平坦な台地で浅間山の噴出物である火砕流軽石粒と降下火山灰が厚く堆積している。この堆積物は雨水による浸食に弱く長い年月の間に深く削り取られ、浅間の麓から放射状に幾筋もの浸食谷（田切り地形）を形成している。これに対し南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地で、川床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。

今回、調査を行った平馬塚遺跡群は、佐久平の南部地域、千曲川左岸の氾濫源沖積地に所在する。

（北佐久郡志 第一巻 自然編参考）

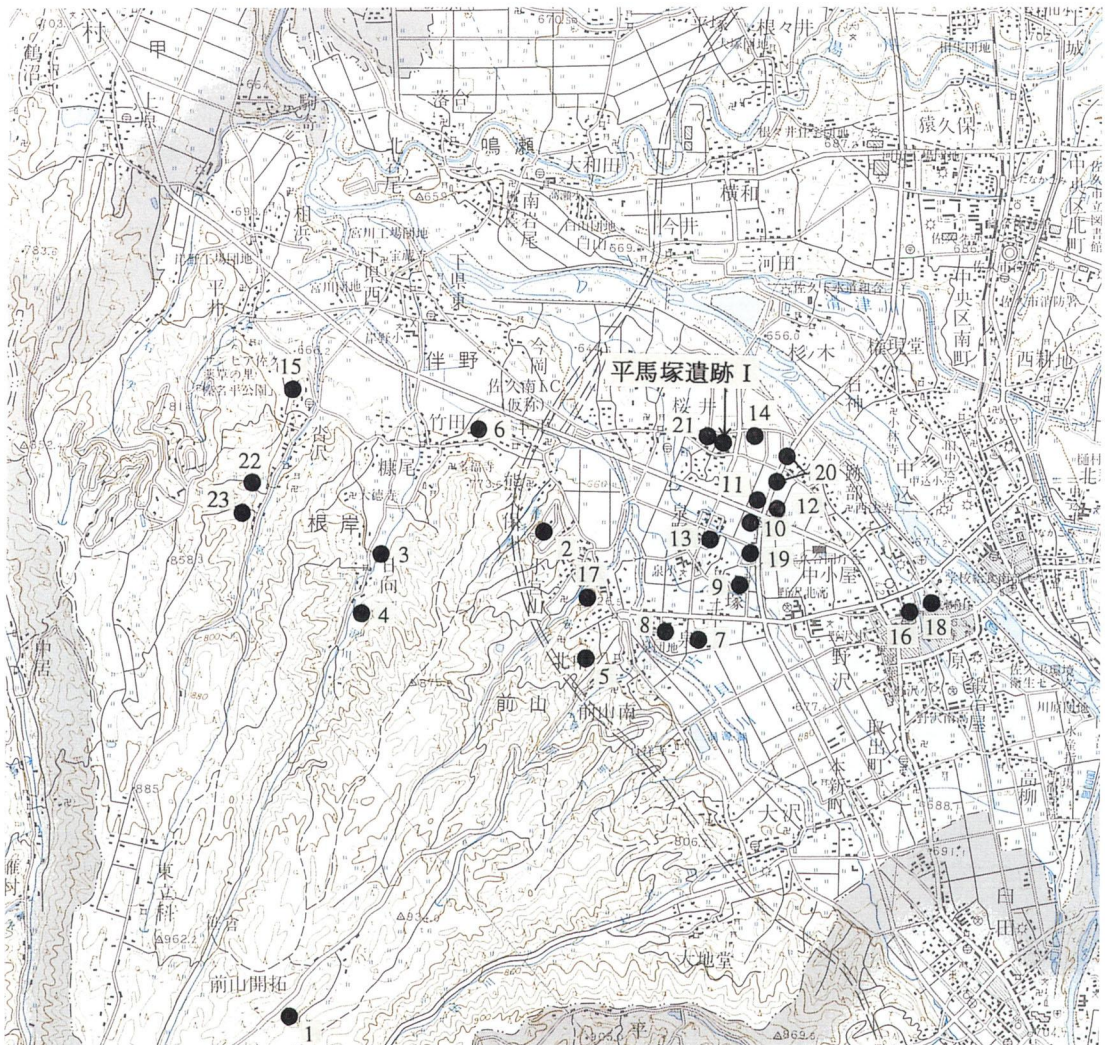


佐久平航空写真（南から）

第2節 周辺遺跡

平馬塚遺跡は北側を北西流する千曲川と、西を北流する片貝川に挟まれたほぼ平坦な氾濫源沖積地上に位置し、西方には蓼科山のすそ野がのび、この一帯は旧石器時代から中世に至る遺跡が存在し、多くの発掘調査が行われている。

旧石器時代の遺跡は、平馬塚遺跡 I の南西方向の山麓中に立科 F 遺跡が所在し、調査によって211点の石器が検出され、検出層位から31200±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡は、主に西方の蓼科山麓末端部の緩斜面上に認められ、前期前半の住居址6軒が検出された後沢遺跡、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡、筒村 B・山法師 B 遺跡、後期の敷石住居2軒を検出した瀧の下遺跡、中期から後期を中心とする土器の包含層が認められた村上遺跡などが存在する。弥生時代の遺跡も縄文時代同様蓼科山麓末端の舌状台地上に認められ、中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が検出さ



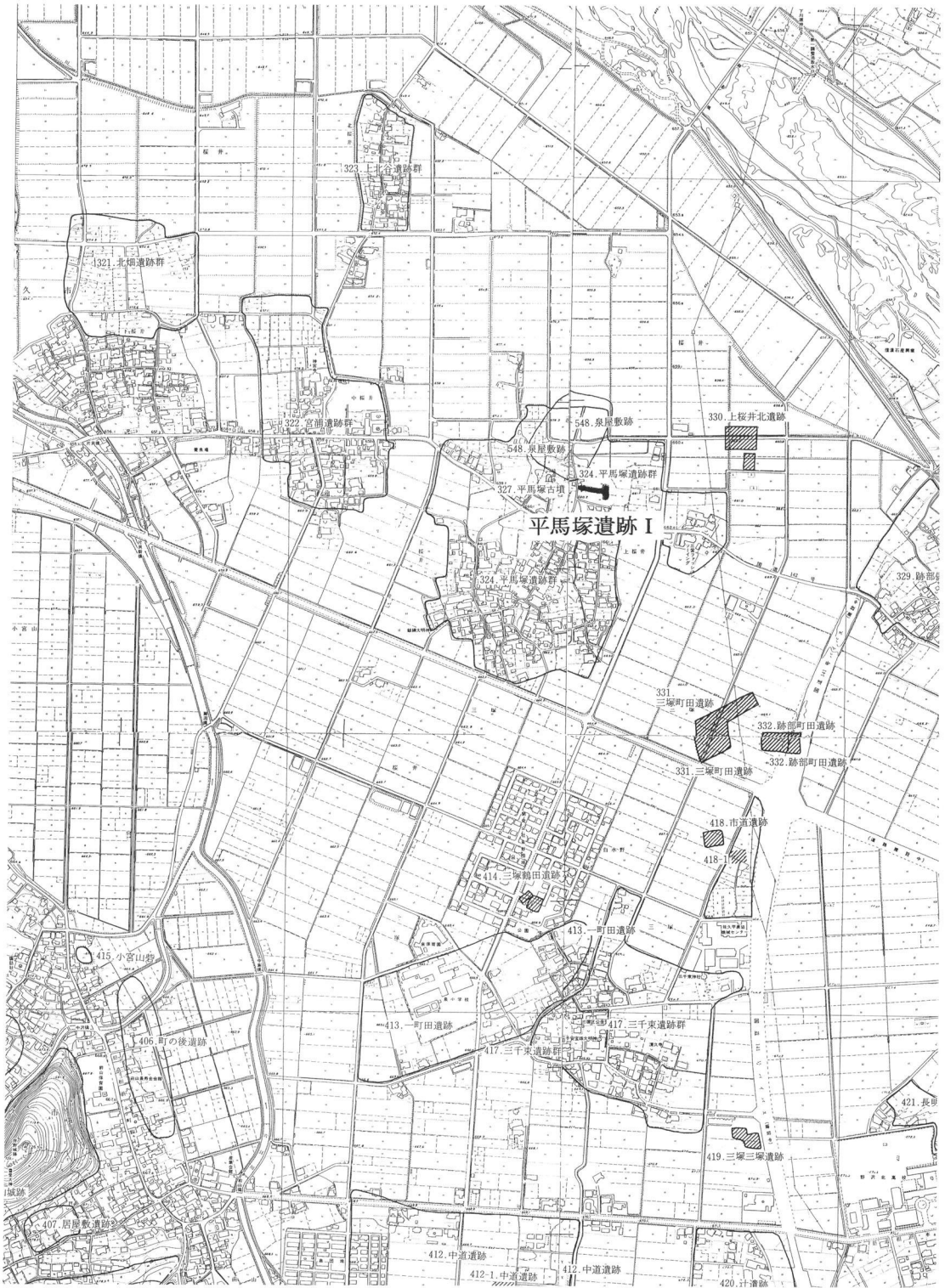
第2図 平馬塚遺跡 I 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000)

れた後沢遺跡、中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒、後期の壺棺を検出した西裏・竹田峯遺跡が存在する。また、一段低い片貝川北の沖積地上に位置する中道遺跡Ⅱの黒色帯からは弥生式土器及び弥生時代の穂積み具である石包丁が出土している。この地に集落が存在していたかは断定できないが、この時代、沖積地一帯で稲作が行われていた可能性を伺い知ることができる。古墳時代になると前期では蓼科山沢筋の緩斜面上に位置する新海坂・村上遺跡が所在し、合わせて7軒の住居址が発見されている。中期・後期になると遺跡は沖積地まで広がり、平馬塚遺跡周辺では寺添遺跡、市道遺跡、三塚町田遺跡、跡部町田遺跡、跡部儘田遺跡、三塚鶴田遺跡、上桜井遺跡等多くの遺跡をあげることができる。これらの遺跡は沖積地の中でも自然堤防上や微高地上に立地する。古墳址は根岸地積の榛名平・坪の内遺跡で後期から終末期に属する横穴式石室を有する古墳1基と坪の内古墳が調査されている。平馬塚遺跡群内にも未調査ではあるが平馬塚古墳が1基存在する。佐久市における古墳の分布状況は今回調査地域周辺の千曲川左岸の低地、山麓には古墳址が少なく、千曲川右岸の低地、山麓には多くの古墳群が存在するといった対照的な様相を示している。奈良・平安時代の遺跡は古墳時代と同様に沖積地の自然堤防、微高地上に多く認められ、市道遺跡、跡部儘田遺跡、榛名平遺跡、上桜井北遺跡、寺添遺跡等が存在する。中世鎌倉時代以降になると野沢地域周辺では伴野氏の活躍が始まる。調査区の南東には方形の区画を持ち、現在も土塁の一部を確認することのできる野沢館跡、南方では戦国時代に伴野氏が築いた山城である前山城が存在する。西の榛名平遺跡からは中世後期と考えられる土壙墓、火葬墓が多数検出されている。今回調査区となった平馬塚遺跡群内には中世の屋敷跡と伝承が残る泉屋敷跡が存在し、西側では石堂遺跡の調査が行われ、中世の竪穴状遺構などが発見され15c代の遺物が出土している。

(佐久市埋蔵文化財調査報告書 第44集 寺添遺跡 歴史的環境 一部改訂)

No.	遺跡名	所在地	立地	旧	縄	弥	古	歴	中	近	備考
1	立科F遺跡	前山字立科	山地	○							平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵		○	○	○	○			昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地		○						昭和57年調査
4	筒村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地		○				○		平成3・4年調査
5	瀧の下遺跡	前山字滝の下	丘陵		○						平成2年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西浦・竹田峯	丘陵先端			○	○	○			昭和60年調査
7	中道遺跡	前山字中道	沖積、微高地			○	○	○			昭和46年調査
8	中道遺跡Ⅱ	前山字中道	〃			○	○				平成9・11・13年
9	寺添遺跡	三塚字寺添	〃				○	○			平成6年調査
10	市道遺跡	三塚字市道	〃				○	○	○	○	昭和49年調査
11	三塚町田遺跡	三塚字町田	〃				○				昭和50年調査
12	跡部町田遺跡	跡部字町田	〃				○				昭和46年調査
13	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	〃					○			昭和50年調査
14	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	〃				○	○			昭和52年調査
15	榛名平・坪の内遺跡	根岸字榛名平・坪の内	丘陵		○	○	○	○	○		平成5・6年調査
16	野沢館跡	野沢字居屋敷・北田	沖積、微高地					○	○		平成13・14年調査
17	前山城跡	小宮山字城山	山地					○	○		
18	薬師寺遺跡	原字屋敷	沖積、微高地						○	○	平成11年調査
19	宮添遺跡	三塚字宮添	〃				○	○	○		平成11年調査
20	跡部儘田遺跡・跡部町田遺跡	跡部字儘田・口明塚	〃				○	○	○		平成11年調査
21	平馬塚古墳	桜井字平馬塚	〃				○				
22	新海坂遺跡	根岸	山地沢筋				○	○			平成11年調査
23	村上遺跡	根岸	〃		○		○				平成11年調査

第1表 平馬塚遺跡Ⅰ周辺遺跡表



第3図 平馬塚遺跡I周辺遺跡地図 (1 : 1,000)

第3節 桜井地区の歴史

桜井地区は千曲川左岸の沖積地上の北に向かって緩やかに傾斜する穀倉野沢平の扇端をなしている。そのため湧水が豊富で水利に恵まれ、佐久鯉の産地としても名高い。

桜井・前山・岸野・大沢など片貝川下流域は、佐久平における古代水田の最も早く開けた地域である。弥生時代後期には下桜井北・中桜井宮浦・上桜井北・町田・十二塚等に生活の痕跡（土器の散布等）が認められ、古墳時代になるとはっきりとした集落の存在を確認することができる。

ちょうどこの頃、大和朝廷によって国・郡・郷・里制が布かれると、この片貝川下流域の水田地帯には刑部郷が設置された。（和妙類聚抄）大和朝廷における有力氏族である大伴氏の一派は、はやくから松本平にはいつて筑摩の県の主宰者としてその勢力を張っていたが、その一部はさらに東信地方に入った。小県郡海野には平安時代をはじめ大伴連忍勝というものが氏寺を建てていたことが知られている。（日本霊異記）彼らの一族は佐久郡にも入り、その勢力にものをいわせて、刑部郷を中心として付近の沖積平野の開墾を行い、律令制度の崩壊につれてこれを荘園化してついに伴野庄が成立したのである。延喜式の佐久郡大伴神社も彼等大伴氏の一族によって祀られたものであろう。

伴野庄はやがてその在地領主権を確保するために、中央の有力貴族である藤原氏に寄進され、それはまた平安時代末期にはさらに院領に寄進されている。（大徳寺文書）平安時代末期には、次第に実力を養ってきた地方の農民地主が武士化して、源氏・平氏を棟梁として、ついに公家になって政権を握ることになる。保元・平治の乱には根井・根津・平賀など佐久武士が活躍している。（保元・平治物語）さらに以仁王の令旨を奉じて平家追討の旗揚げをした木曾義仲軍では、佐久の武士団がその主力を構成している。根井・楯の父子を中心に、八島・根津・海野・落合・小室（諸）・望月・志賀・平原などがある。その中に桜井太郎、同次郎の名があるのに注目しなければならない。（源平盛衰記）望月牧を中心とする佐久の牧馬と佐久平の米の生産力が佐久武士団の戦力をここまで高めたのである。桜井太郎、次郎も北陸道を怒濤のように進撃する木曾軍の武将として、桜井郷の一族郎党を率いて平安の都に旗を立てたことであろうが、木曾軍の敗戦によって雄図むなしく、その後どうなったか知ることができない。源頼朝は平家討滅の戦功によって、佐久郡伴野庄の地頭職を甲斐源氏の小笠原長清に与えた。（吾妻鏡文治二年十月十七日の条）

長清は頼朝の信任厚い鎌倉幕府の重臣で、甲斐・信濃等の諸国に多くの所領を有したが、そのうち佐久郡伴野庄を六男時長に大井庄を七男朝光に与えた。伴野荘地頭小笠原時長、時直の父子二代は小笠原惣領職をもって威勢頗る盛んであり、騎射に長じて典型的な鎌倉武士であった。弘安二年（1279）十二月、一遍上人が伴野庄を訪れ踊り念仏を行ったのは時直の時で、（一遍上人絵伝）野沢の金台寺はそのとき時直によって念仏道場として開基され、跡部の踊り念仏はその伝統を今に伝えているものとされている。また跡部の鐘鑄場地積はこのとき伴野時直が鐘磬を鑄させて一遍上人に寄進した鑄鉄場の跡であるといわれている。

伴野小笠原氏は時直の子長泰のとき、弘安八年（1285）十一月、安達泰盛の乱（霜月騒動）に連座して、父子五人北条氏のため誅せられ壊滅的な打撃を受けてしまった。

元徳元年（1329）三月の諏訪神社の五月会頭役結番の中に、佐久郡伴野庄桜井・野沢・白田郷丹波前司跡とある。（守矢文書）丹波前司は丹波守であった北条氏をさすものと考えられるから、霜月騒動以後は桜井郷は北条氏が地頭になっていたものと思われる。

元徳二年花園上皇は佐久郡伴野庄を京都の大徳寺に寄進した。元弘三年（1333）五月後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒すと、その六月にその伴野庄地頭職も大徳寺に寄進した。

建武二年（1335）に伴野庄の現地の役人が大徳寺の年貢に伴野庄の年貢の数量を報告しているのをみると、

野沢千三百貫文、伴野上中下三ヶ村（現在の小宮山を除く旧前山村全体）千貫文について、桜井郷八百余貫文とあり、桜井郷が伴野庄内の大村であったことがわかる。しかも郷内に領主の直営地である佃も二町あり、桜井郷が地味の肥えた良田であったことを示している。（大徳寺文書）

そのころ伴野出羽弥三郎長房が、伴野庄内で勢力をもちかえし、伴野荘の年貢を横領して大徳寺へ送らなかったため、大徳寺から朝廷や幕府に訴えたが、長房の代官がなかなかいいうことをきかなかった。（大徳寺文書）

伴野長房は足利尊氏に属し、尊氏の重臣高師直と親しかったらしい。彼は都の工御門油小路に邸をもち、伴野庄には代官を置いて管理させた。興国六年（1345）八月には足利尊氏、直義が天童寺供養の儀にのぞむにあたってその戦陣随兵を勤めるなど、かなりの勢力をもっていたが、正平八年（1353）六月九日長房は足利義詮の軍に属して京都の神楽岡で、南朝方楠正儀らと戦い、敗れて戦死し、彼の工御門油小路の邸も焼失した。（園太歴）

戦国時代には伴野光利が前山城を築いて、光信・貞祥・信守と伴野氏は代々前山城によった。伴野庄の各郷村には一族や家臣を代官として分置してその管理にあたらせた。諏訪御符礼之古書をみると桜井郷の代官として次のような名が見える。康正二年（1456）と寛正六年（1465）鷹野中務満吉。応仁元年（1467）入道沙弥道中子息鷹野又五郎橘吉吉。文明十二年（1480）鷹野美濃守満守、長享二年（1488）土佐守棟信、丹後守棟清等で、戦国時代のはじめの頃は桜井郷は鷹野氏が前山城主の代官として管理にあっていたものである。

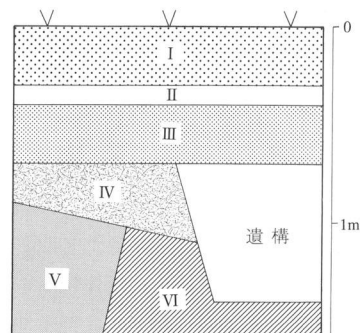
天正十年（1582）前山城の落城の際に伴野氏の家臣、桜井郷の桜井其の子、諏訪十という九才ばかりの童子が遊びから帰って、家の門戸が閉ざされているのを見て父の教えに従って畦道づたいに前山城に行き、途中敵兵に追われながらも危うく伯父に助けられて城内に入り、激しい合戦の模様を目にしたことが四類譚叢に書かれている。当時の地方武士＝農民の姿をありありととらえることができる。ふだんは土地を耕し、いざといえば城にかけつける兵農未分化の時代であったのである。以上が中世に至るまでの桜井郷の概略である。

今回調査地域の西に隣接して延命寺が所在することから、桜井の寺院関係について若干のべると、この寺の自伝によると創建は平安時代とされ、当時堂宇すこぶる広大であったが、天正年間に焼失した。これを天正十一年（1583）に平馬城主源実相がじぶんの居城の丘の一部に中興開基したものであるという。また、桜井諏訪神社の西に神宮寺がある。寛永六年（1629）検地のとき神久寺といって諏訪神社の別当地であった。その他下桜井に金剛寺、桜井新田に極楽寺があったが、この二寺はいずれも江戸時代の開基で廃寺となっている。

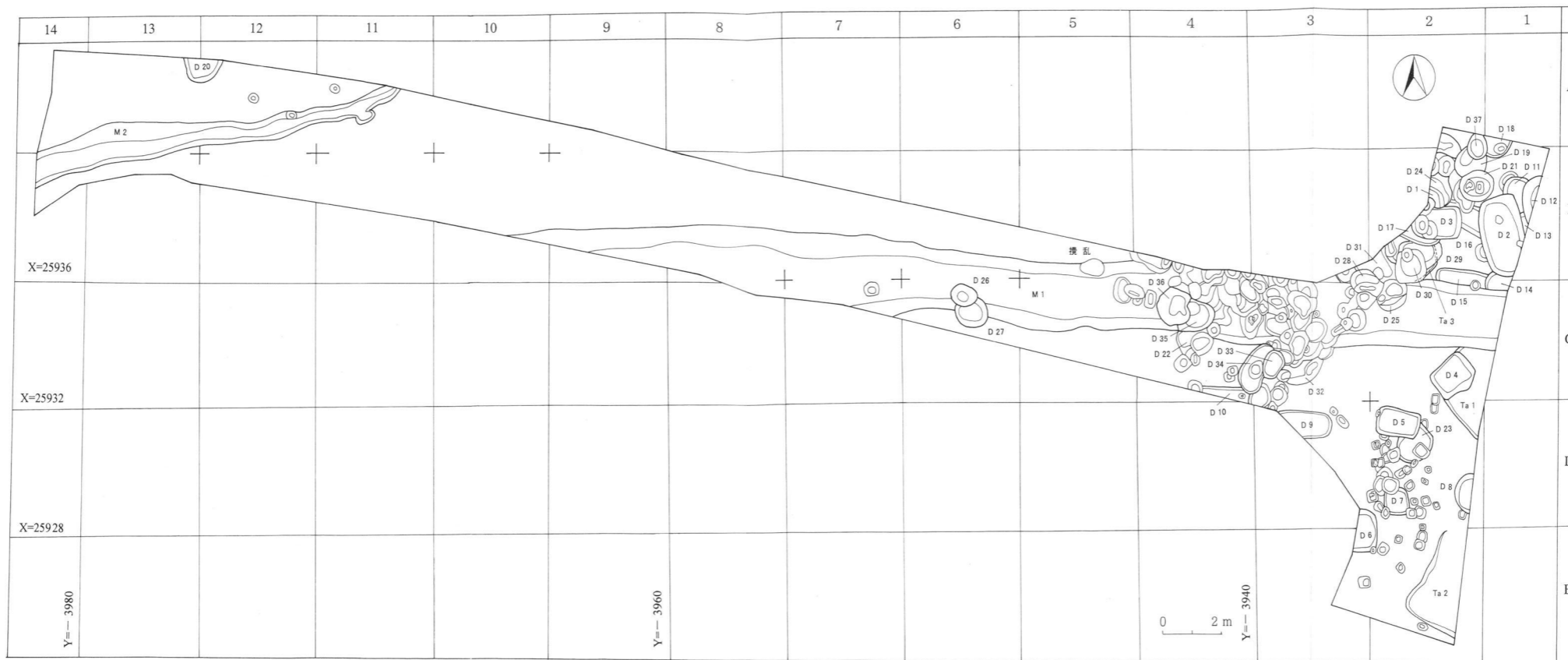
佐久市教育委員会発行 上桜井北遺跡 歴史的環境 2) 桜井の歴史 (井出 正義) 一部改訂

第3節 基本層序

遺跡は千曲川左岸の氾濫源沖積地に所在し、北には北西流する千曲川、西には北流し調査区の北西2.5kmで千曲川と合流する片貝川が存在する。このため付近の層序は基本的には氾濫源特有の沖積粘土層・砂礫層によって構成される。調査対象地は水田耕作土上に客土し畑地となっており、上層からやや粘性の表土、水田面、粘性の褐色土、粘性シルト質黄褐色土、白色粘土層又は礫層となる。遺構検出は黄褐色土上面で行った。



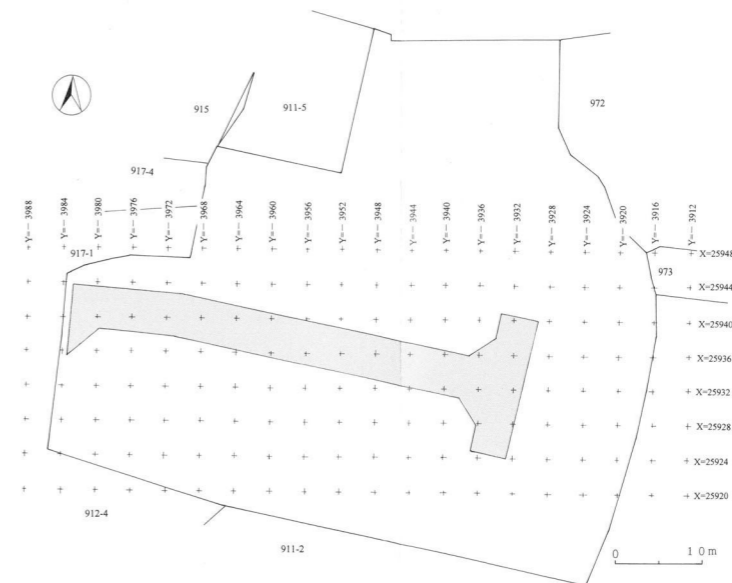
第4図 基本層序模式図



第5図 平馬塚遺跡Ⅰ 遺構配置図



第6図 平馬塚遺跡群試掘調査全体図

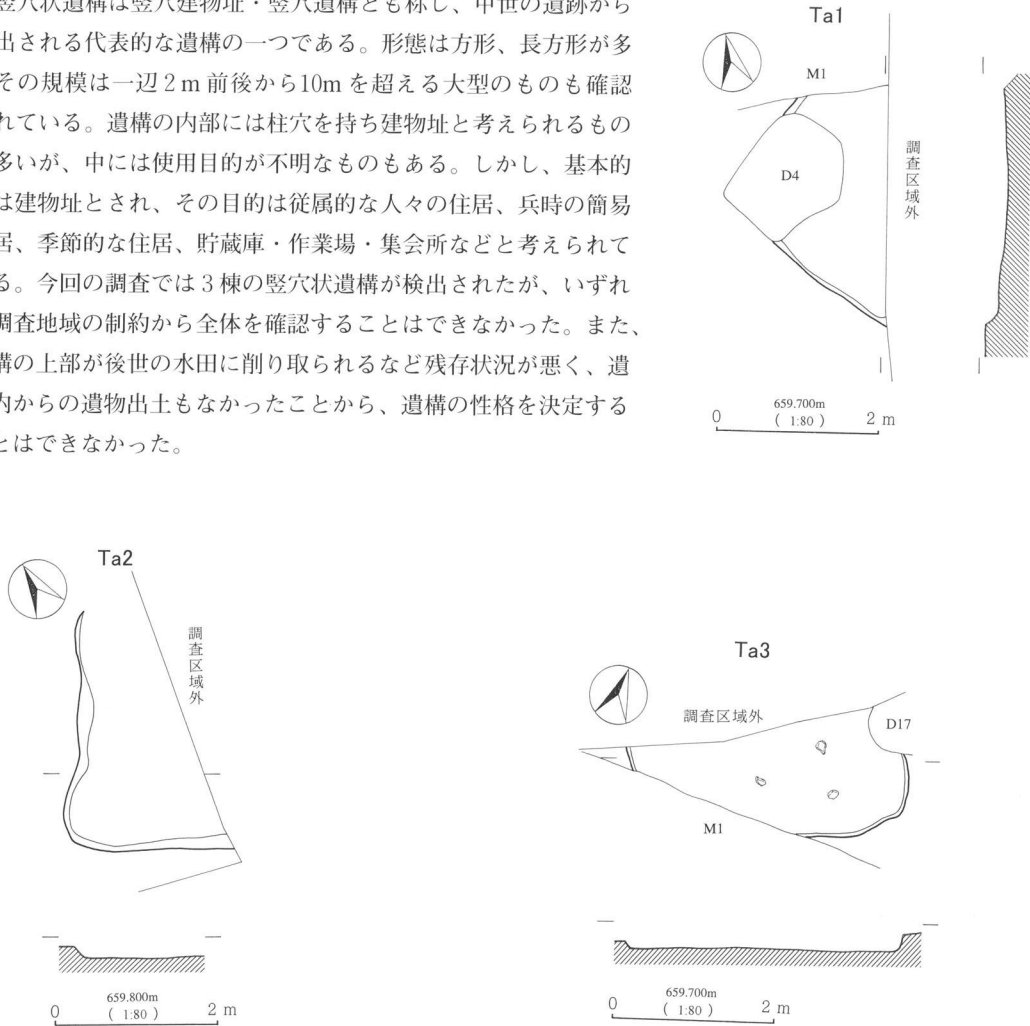


第7図 平馬塚遺跡Ⅰ 調査位置図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 竪穴状遺構 (Ta)

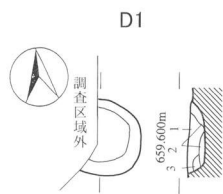
竪穴状遺構は竪穴建物址・竪穴遺構とも称し、中世の遺跡から検出される代表的な遺構の一つである。形態は方形、長方形が多くその規模は一辺2m前後から10mを超える大型のものも確認されている。遺構の内部には柱穴を持ち建物址と考えられるものも多いが、中には使用目的が不明なものもある。しかし、基本的には建物址とされ、その目的は従属的な人々の住居、兵時の簡易住居、季節的な住居、貯蔵庫・作業場・集会所などと考えられている。今回の調査では3棟の竪穴状遺構が検出されたが、いずれも調査地域の制約から全体を確認することはできなかった。また、遺構の上部が後世の水田に削り取られるなど残存状況が悪く、遺構内からの遺物出土もなかったことから、遺構の性格を決定することはできなかった。



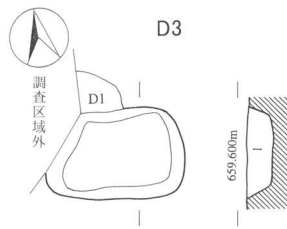
第8図 竪穴状遺構実測図

第2節 土坑 (D)

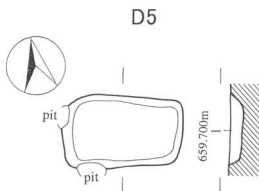
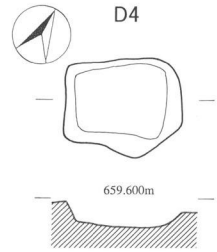
調査区からは重複した数多くの掘り込みが認められたが、本節では平面径80cm以上を測り、比較的形状の明確なものを土坑として扱い、それ以外はピットとした。時代は遺物の出土が僅かなため断定はできないが、周辺一帯は中世の居館とされる泉屋敷跡と称する地域が広がり、出土した陶器類の年代が14~15世紀であり、検出されたピットの形状が方形であることから、中世の所産である可能性が推察できる。用途は墓穴、廃棄穴等が考えられる。



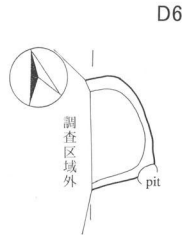
1. 黒褐色土(10YR2/3)
シルト少量。
2. 褐色土(7.5YR4/2)
シルト多い。粘性あり。
3. 暗褐色土(10YR3/3)
シルトブロック含む。



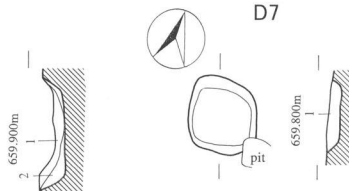
1. 暗褐色土(10YR3/3)
ローム粒、小ブロック多く含む。



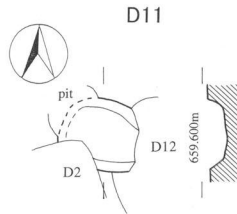
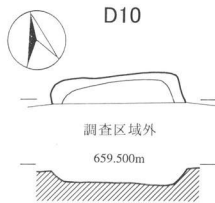
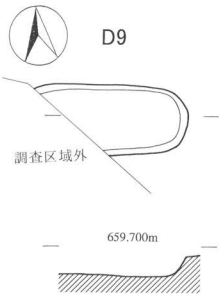
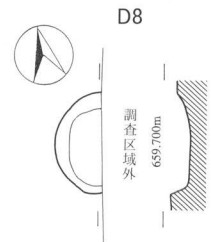
1. 暗褐色土(10YR3/3)
砂、炭化物含む。



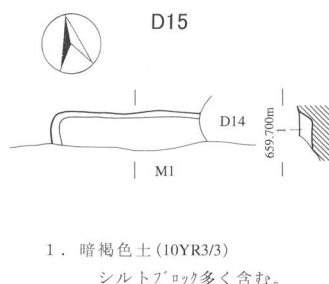
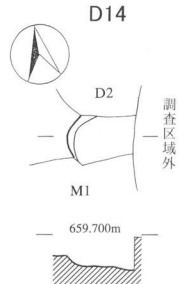
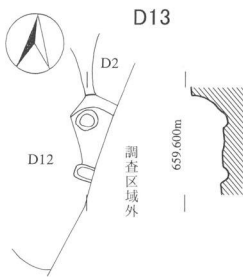
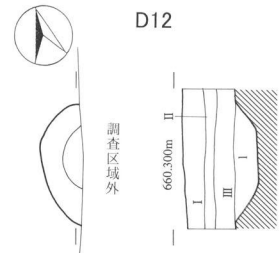
1. 暗褐色土(10YR3/3) 砂、炭化物多い。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 砂、ローム含む。



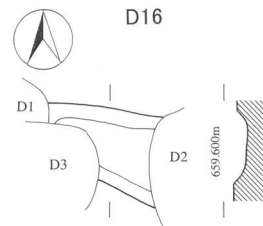
1. 暗褐色土(10YR3/3)
炭化物、石(5cm大)含む。



1. 黒褐色土(10YR2/3) 砂、ローム少量含む。

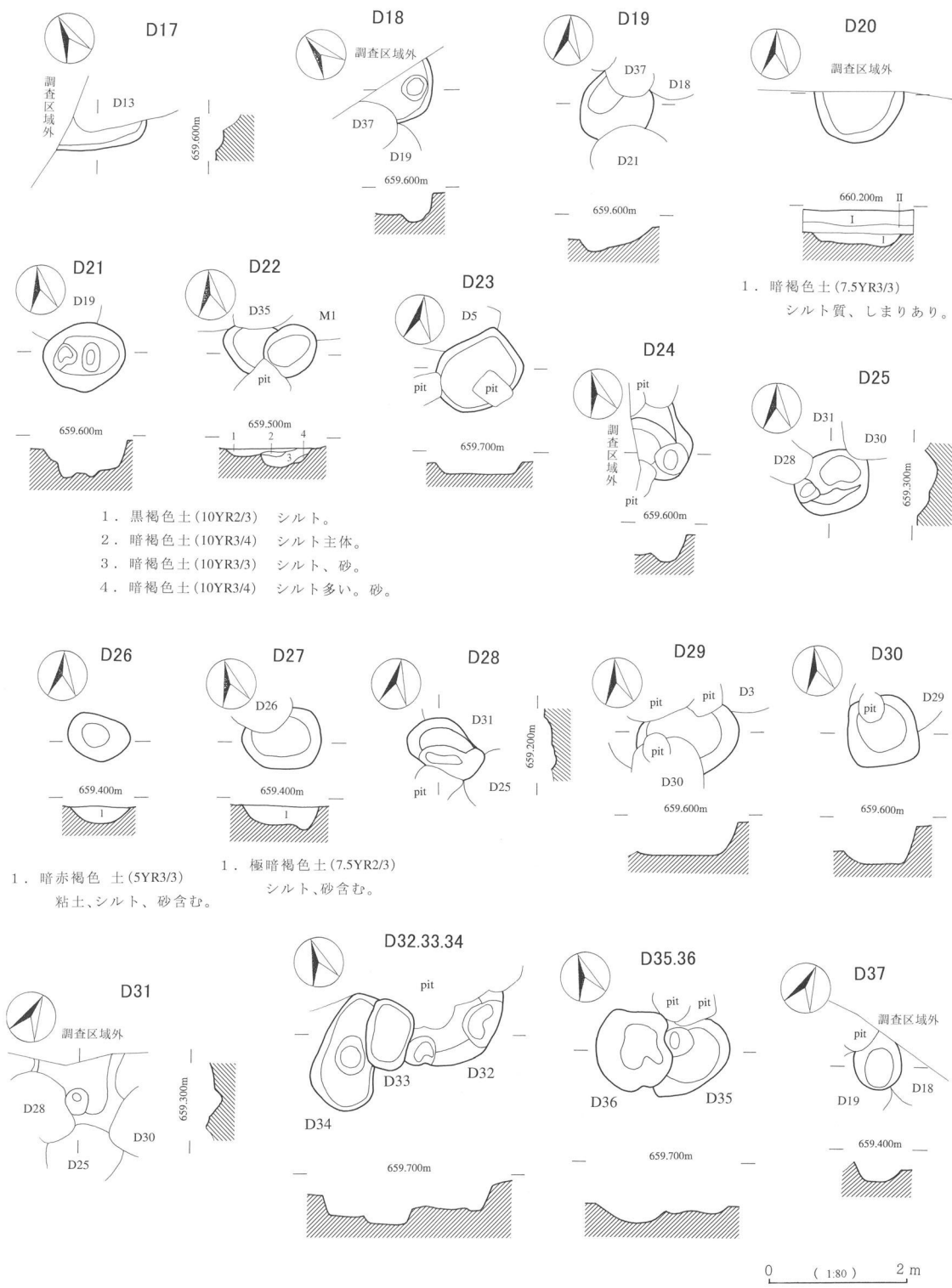


1. 暗褐色土(10YR3/3)
シルトブロック多く含む。



0 (1:80) 2 m

第9図 土坑実測図(1)



I. 暗褐色土(7.5YR3/3)
シルト質、しまりあり。

1. 黒褐色土(10YR2/3) シルト。
2. 暗褐色土(10YR3/4) シルト主体。
3. 暗褐色土(10YR3/3) シルト、砂。
4. 暗褐色土(10YR3/4) シルト多い。砂。

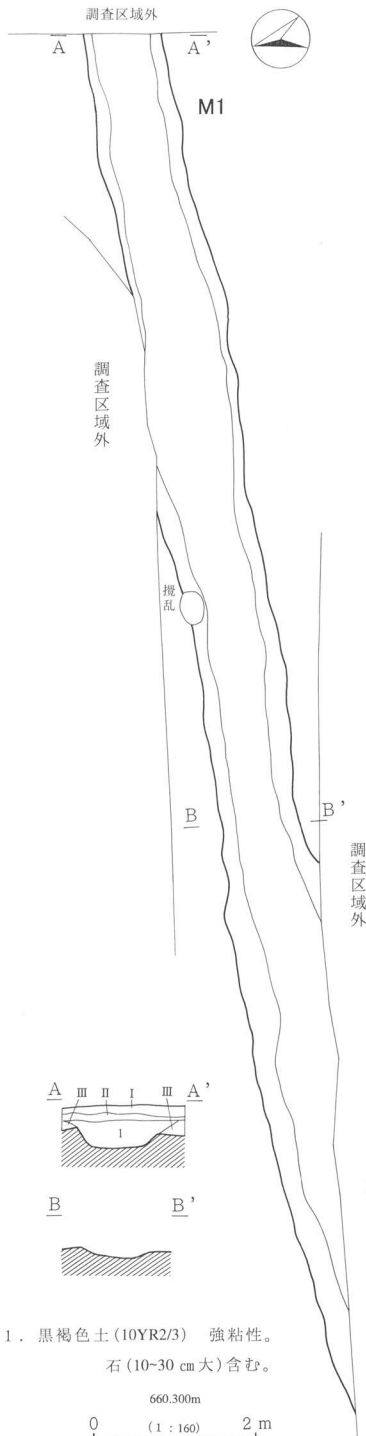
1. 暗赤褐色土(5YR3/3)
粘土、シルト、砂含む。

1. 極暗褐色土(7.5YR2/3)
シルト、砂含む。

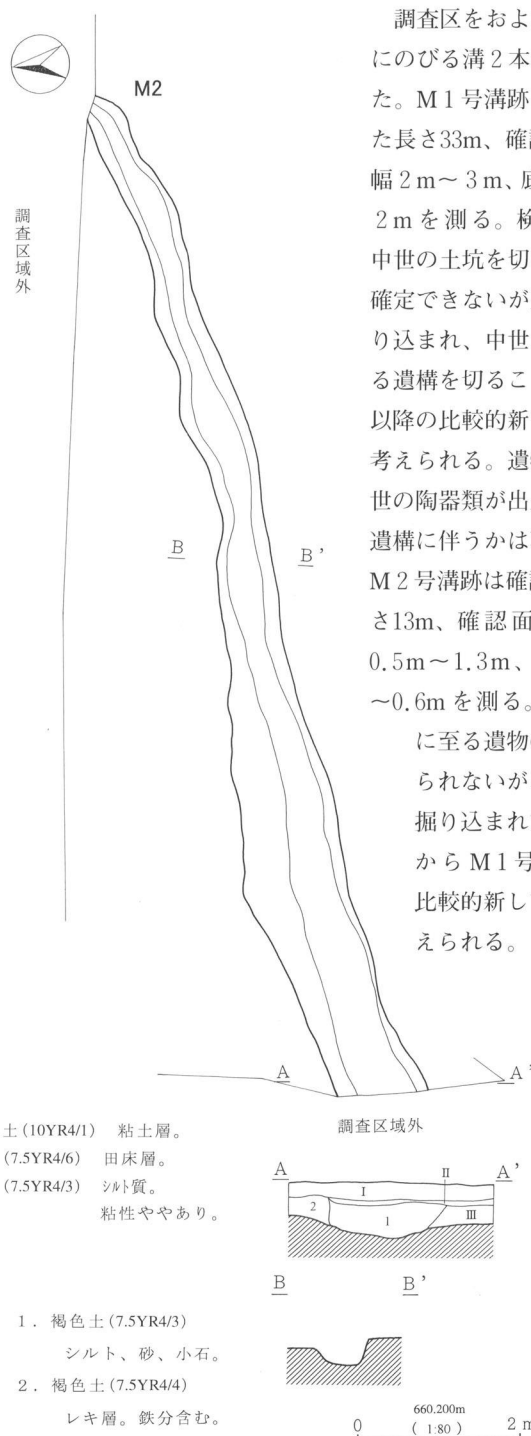
0 (1:80) 2 m

第10図 土坑実測図(2)

第3節 溝跡 (M)



第11図 M1号溝跡実測図



第12図 M2号溝跡実測図

調査区をおよそ東西方向にのびる溝2本が確認できた。M1号溝跡は確認できた長さ33m、確認面上での幅2m~3m、底幅1.1m~2mを測る。検出された中世の土坑を切る。時期は確定できないが上層から掘り込まれ、中世と考えられる遺構を切ることから近世以降の比較的新しい遺構と考えられる。遺物は硯、中世の陶器類が出土したが本遺構に伴うかは不明である。M2号溝跡は確認できた長さ13m、確認面上での幅0.5m~1.3m、底幅0.3m~0.6mを測る。時期確定に至る遺物の出土は見られないが、上層から掘り込まれていることからM1号溝跡同様比較的新しい遺構と考えられる。

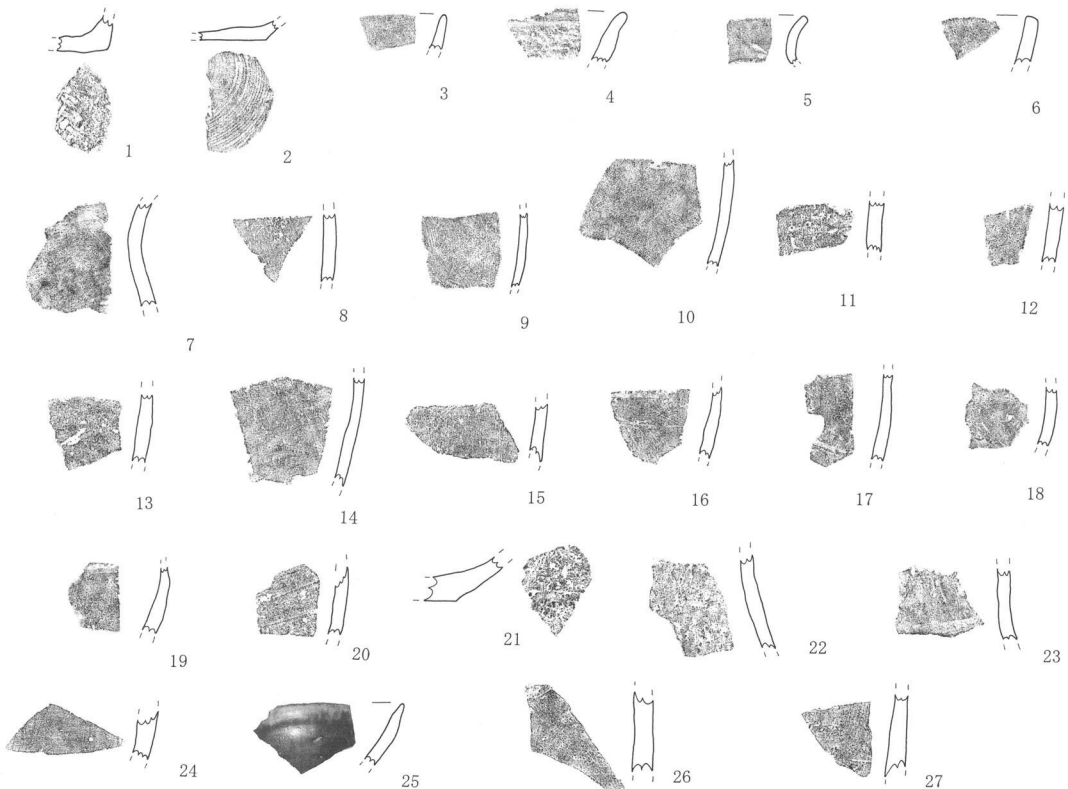
第4節 ピット (P)

調査区東側を中心に多数確認でき、建物址の柱跡と考えられるが、切り合いが激しく整然と並んだものは確認できない。水田によって上面が削られ、いずれのピットも掘り込みは浅い。時期は、ピットの大半が平面方形を呈することから中世の遺構と考えられる。調査区北に隣接して中世の屋敷跡が存在していたとされる地域が認められるため、屋敷跡の範囲が本調査区一帯まで広がると思われる。(配置は遺構配置図参照)

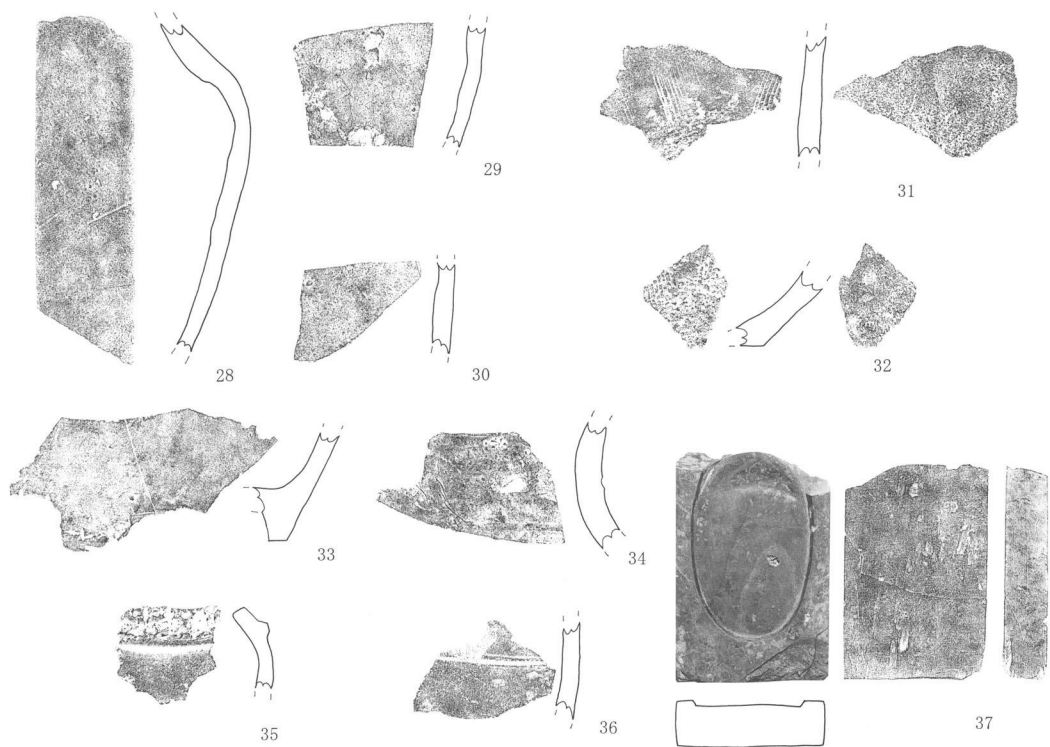
第5節 遺物

本遺跡からは、縄文土器、古墳～平安時代の遺物である須恵器・土師器及び、中世と考えられる陶器類・硯が出土した。須恵器・土師器は遺構検出段階において出土し、土坑・ピットなどの遺構内から出土したものは流れ込みと考えられ、調査区内からは古墳～平安時代の遺構は確認できなかった。しかし、本遺跡の東側では上桜井北遺跡の調査が行われ、古墳・平安時代の住居址などの遺構が多数発見されていることから、付近に同時期の集落が存在する可能性が考えられる。

陶器類は表面鈍い赤褐色をした甕片の割合が多く、愛知県知多半島の常滑産と考えられる。このほか古瀬戸天目茶碗片、在地及び地方で焼かれたと考えられるすり鉢、火鉢、風炉釜が認められる。いずれも14～15世紀と考えられる。また、M1号溝跡からは比較的残存率の高い硯が出土した。硯の確実な時期確定はできないが、陶器類の年代が中世(14～15c)の様相を示すものが多いことから同時期と考えられる。これらの遺物は、本遺跡の北側一帯に存在したとされる泉屋敷跡に関するものであろう。



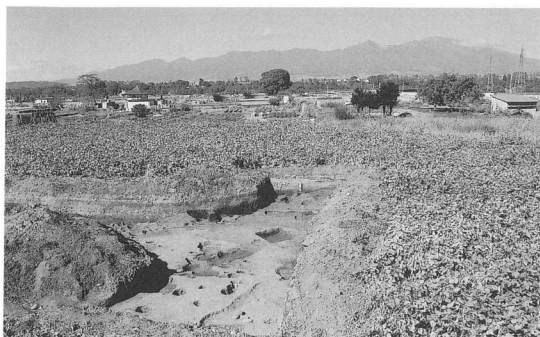
第13図 遺物実測図(1)



第14図 遺物実測図(2)

番号	器種	器形	時代	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	縄文	D17	底部破片
2	土師器	坏	平安	Ta 1	底部破片
3	土師器	坏	平安	M 1	口縁部破片
4	土師器	鉢	古墳	D22	口縁部破片
5	土師器	小型甕	古墳～平安	D17	口縁部破片
6	土師器	甕	古墳～平安	試掘	口縁部破片
7	土師器	甕	古墳～平安	M 1	頸部破片
8	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
9	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
10	土師器	甕	古墳～平安	検出	体部破片
11	土師器	甕	古墳～平安	ピット	体部破片
12	土師器	甕	古墳～平安	M 1	体部破片
13	土師器	甕	古墳～平安	M 1	体部破片
14	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
15	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
16	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
17	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
18	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
19	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
20	土師器	甕	古墳～平安	試掘	体部破片
21	土師器	甕	古墳	M 2	底部～体部破片
22	土師器	高坏	古墳	試掘	体部破片
23	土師器	高坏	古墳	試掘	体部破片
24	須恵器	甕	古墳～平安	ピット	体部破片
25	古瀬戸	天目茶碗	14c 末	D 3	口縁部破片
26	常滑	甕	13c 後半以降	D 1	体部破片
27	常滑	甕	13c 後半以降	D 3	体部破片
28	常滑	甕	13c 後半以降	M 1	体部破片
29	常滑	甕	13c 後半以降	試掘	体部破片
30	常滑	甕	13c 後半以降	試掘	体部破片
31	須恵質	すり鉢	14c	試掘	すり部破片、在地
32	須恵質	すり鉢	14c	M 1	底部～すり部破片、在地
33	須恵質	火鉢	14c	試掘	底部～体部破片
34	常滑	甕	13c 後半以降	D 8	口縁部破片
35	土師質	風炉釜	14後～15c	試掘	体部破片、在地
36	土師質	風炉釜	14c	試掘	体部破片(接合部あり)
37	硯	—	14～15c	M 1 覆土	一部欠損

第2表 遺物観察表



調査区東側全景（南から）



調査区全景（西から）



表土除去作業（西から）



調査風景（南から）



遺構検出状況（南東から）



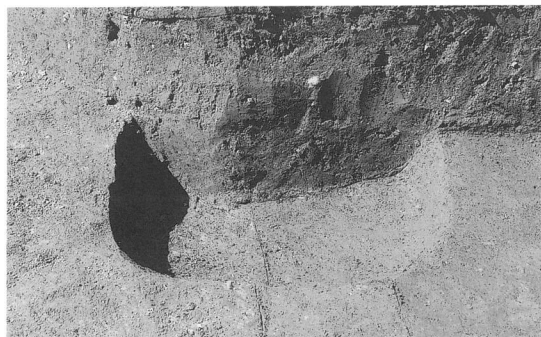
Ta1号竖穴状遺構全景（南から）



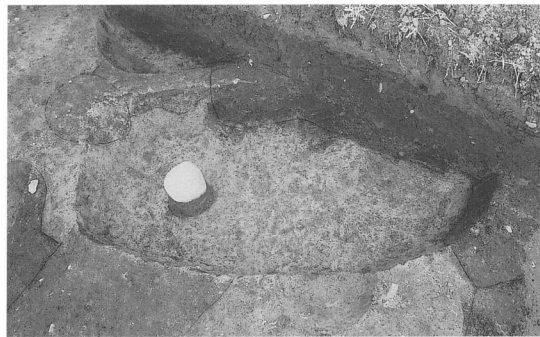
Ta2号竖穴状遺構全景（西から）



Ta3号竖穴状遺構全景（南から）



D 1号土坑全景（東から）



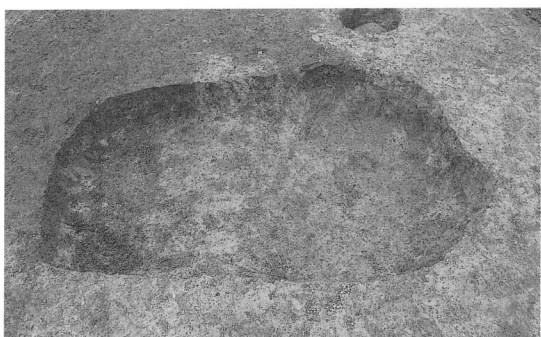
D 2号土坑全景（南西から）



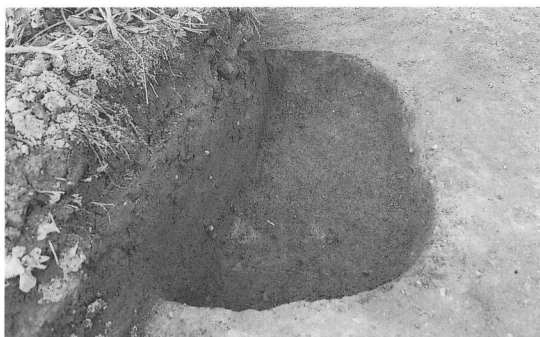
D 3号土坑全景（南東から）



D 4号土坑全景（南から）



D 5号土坑全景（北から）



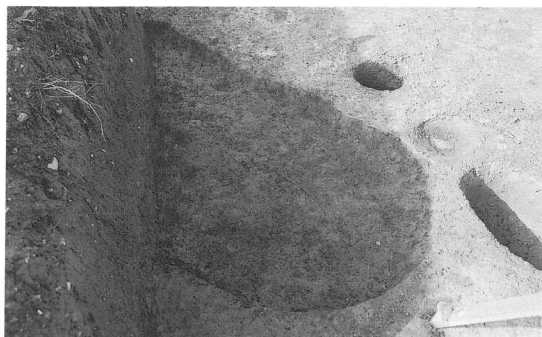
D 6号土坑全景（南から）



D 7号土坑全景（南から）



D 8号土坑全景（西から）



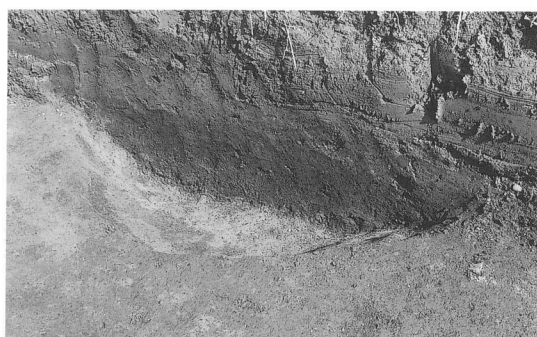
D 9号土坑全景（南西から）



D10号土坑全景（北から）



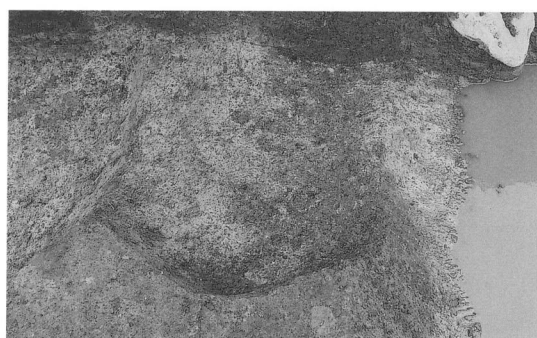
D11号土坑全景（西から）



D12号土坑全景（西から）



D13号土坑全景（西から）



D14号土坑全景（西から）



D15号土坑全景（南から）



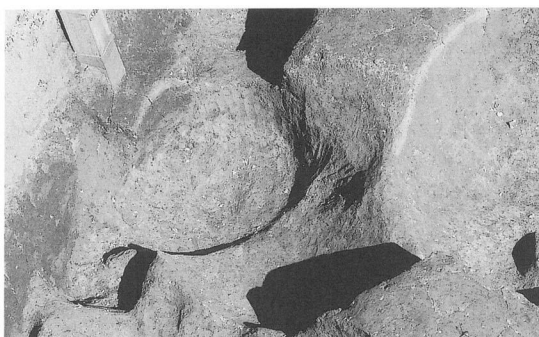
D16号土坑全景（南から）



D17号土坑全景（東から）



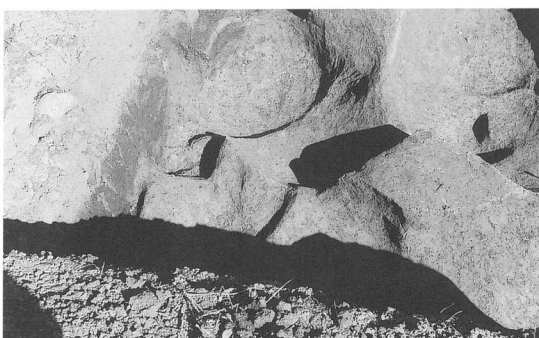
D18号土坑全景（西から）



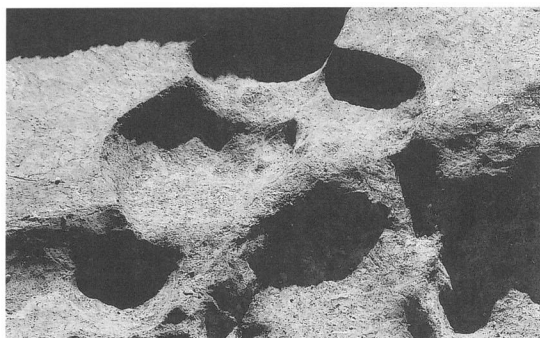
D19号土坑全景（西から）



D20号土坑全景（東から）



D21号土坑全景（西から）



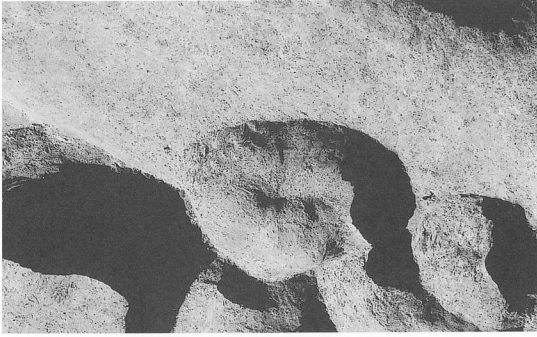
D22号土坑全景（北から）



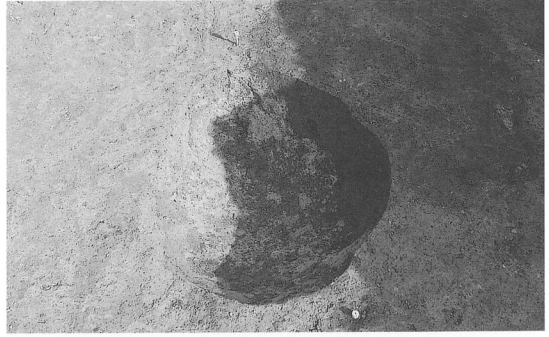
D23号土坑全景（西から）中央



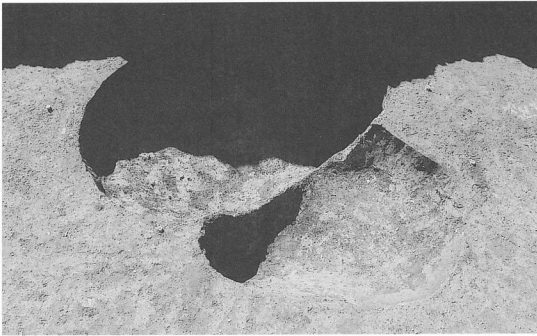
D24号土坑全景（西から）



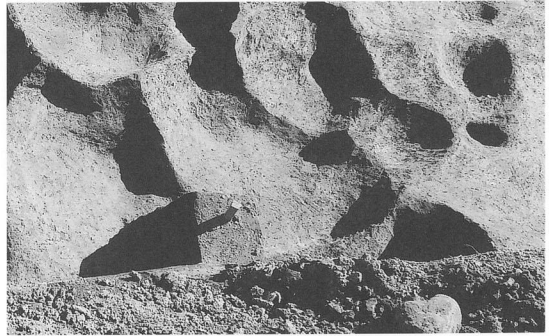
D25土坑全景（北西から）



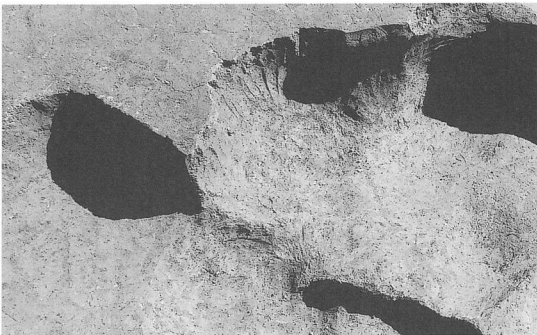
D26土坑全景（東から）



D27土坑全景（北から）奥



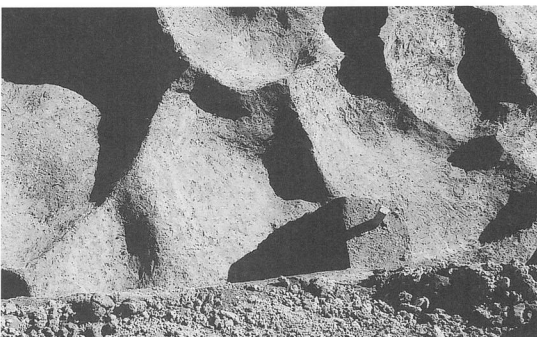
D28土坑全景（北西から）



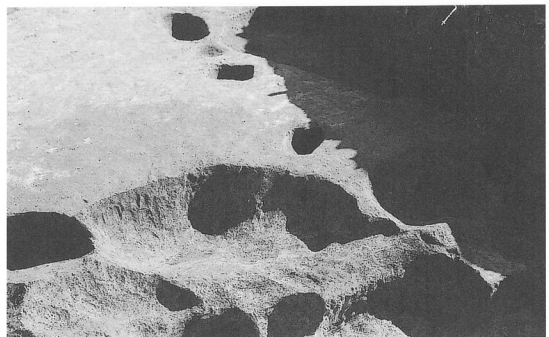
D29号土坑全景（北西から）



D30号土坑全景（北西から）



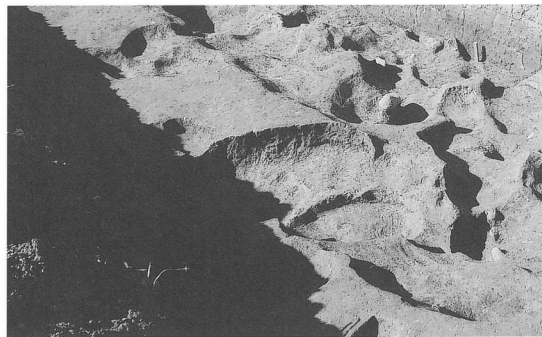
D31号土坑全景（北西から）



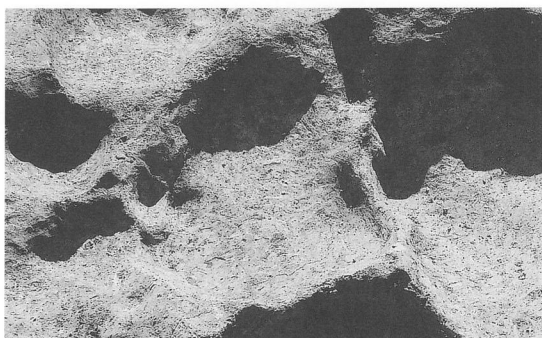
D32号土坑全景（北西から）



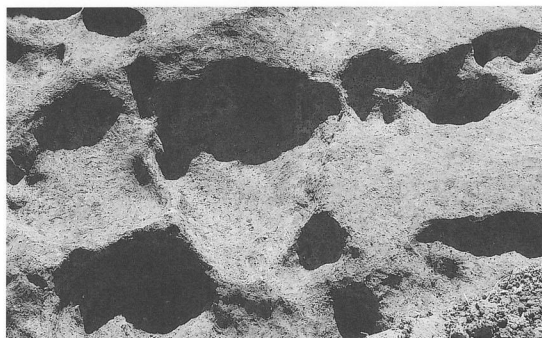
D33号土坑全景（北から）



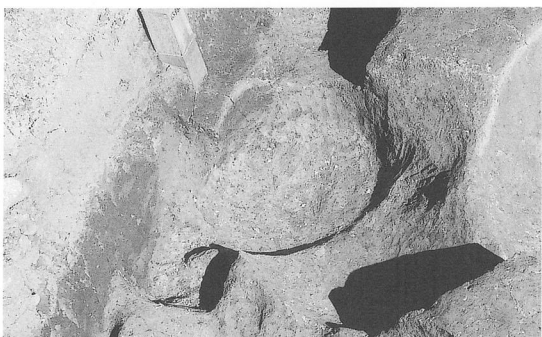
D34号土坑全景（南東から）



D35号土坑全景（北から）奥



D36号土坑全景（北から）



D37号土坑全景（西から）



M1号溝跡全景（東から）



M2号溝跡全景（東から）



M1・2号溝跡全景（西から）



調査区西側遺構状況（東から）



D23号土坑周辺 遺構完掘状況（西から）



Ta 2 号竖穴状遺構周辺 遺構完掘状況（西から）



D21号周辺 遺構完掘状況（西から）



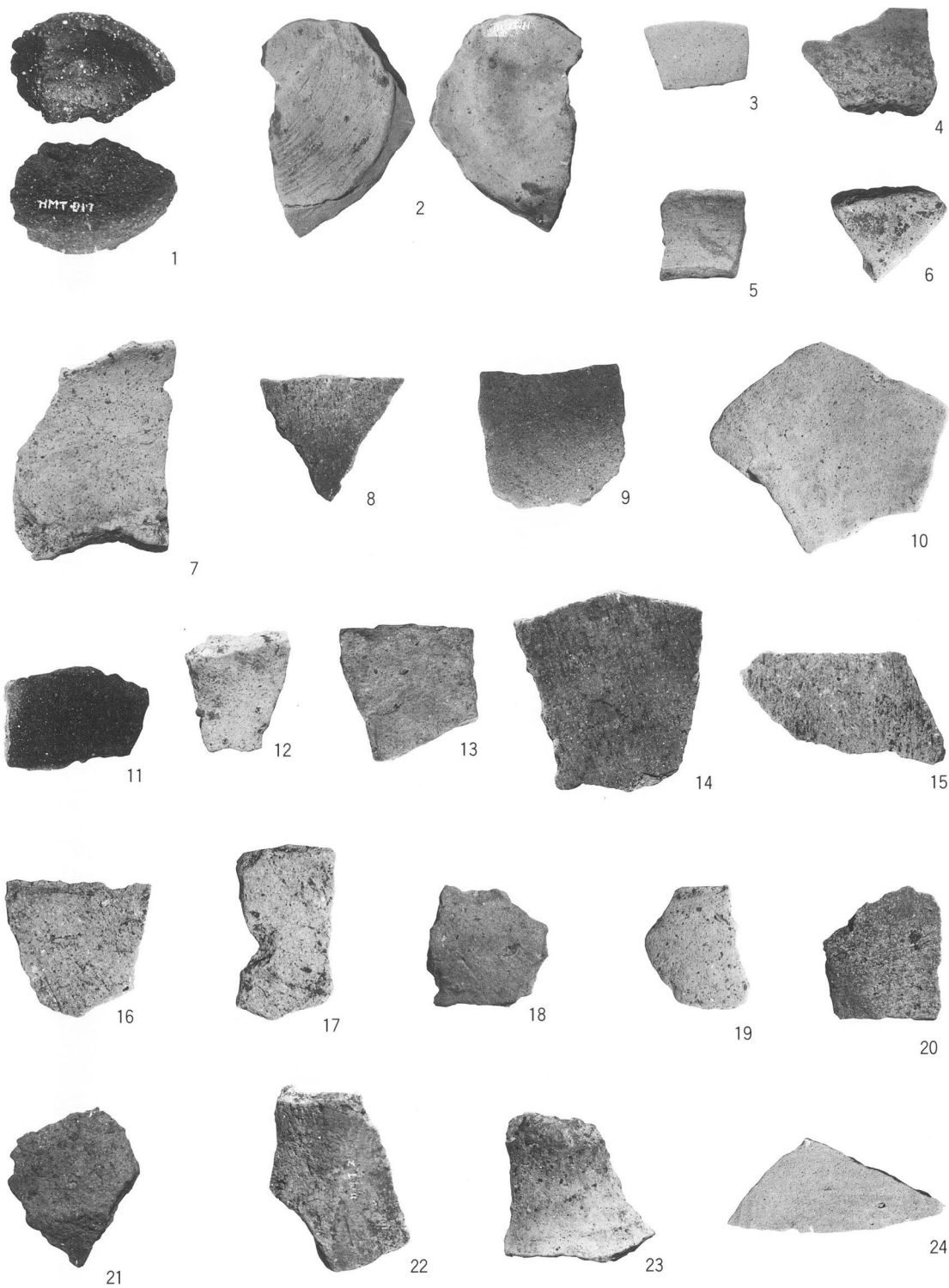
D30土坑周辺 遺構完掘状況（西から）



D25土坑周辺 遺構完掘状況（南西から）



調査区東側 M1 号溝跡周辺遺構完掘状況（西から）



出土遺物

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第130集

平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡 I

2005年 2月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 佐久印刷所

報告書抄録

書名	平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡 I
副書名	
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	上原 学
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2005. 2. 28
作成機関ID	
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953
遺跡名	平馬塚遺跡群 平馬塚遺跡 I
遺跡所在地	長野県佐久市大字 桜井911-1
市町村コード	
遺跡番号	
北緯	X = 25932
東経	Y = -3936
調査期間	2004. 10. 4 ~ 2005. 2. 26
調査面積	330m ²
調査原因	宅地造成
種別	屋敷跡
主な時代	中世
遺跡概要	遺構 竪穴状遺構 3棟、土坑 37基、溝跡 2条、ピット 遺物 縄文土器、土師器、須恵器、陶器、土師質・須恵質土器、硯
特記事項	今回の調査によって、中世と考えられる上記の遺構が検出された。調査区の北西には中世の遺跡である泉屋敷跡が存在することからこれに関係する遺構と考えられ、屋敷跡とされる遺跡の範囲が広がるものと思われる。また遺跡の東では古墳～平安時代の集落址である上桜井遺跡の調査が行われており、本調査区からも同時期の遺物出土が認められることから周辺に古墳～平安時代の集落が存在すると推察される。